

おぼけの季節【本のおぼけ篇】

陽羅 義光

怪談、怪奇読物はもとより、スリラー、サスペンス小説、このごろでは「オカルトノベル」とか「ファンタジーノベル」とかのジャンルもあられ、いろんな本のなかに、おぼけや幽霊や怪物が出てきます。

けれども、「本そのもの」のおぼけにはお目にかかれません。

お目にかかれないと、どうしてもお目にかかりたいのが、金ちゃんの性分で、果して懐爺が、その要求に応えられるかどうか。

それが本篇の、みどころであります。

それでも本好きには、ときとして(ほんのたまにはありますが)「本そのもの」が、おぼけに見えるときがないでしょうか。

おぼけに見えなくとも、べつだん古い本でもないのにおぼけくさい臭いがしたり、べつだん温めているわけでもないのに湯気が出ていたり、虫干ししたら奇妙な虫が這いずり出てきたり、眼に異常があるはずもないのに活字が歪んで見えたり踊って見えたり、あるはずの場所からちがう場所に移っていたり、ある重要な頁が千切れていたり、突然白紙の頁が現れたり、単行本のはずなのにいつのまにか文庫本に変わっていたり、太宰治を読んでいたはずがいつのまにか坂口安吾になっていたり、そんなことがなかったでしょうか。

それはもしかすると、「本のおぼけ」なのかもしれません。

前置きはこのくらいにして、また金ちゃんと懐爺に登場してもらいましょう。

禿光山人 拝

* * *

「かいじいよ、ねとるんか、それとも、しんどるんか」

「死んどります。ですから明日きてください」

「あほかい。しんどるやつが、しゃべるか」

「そうでしたね、失敗しました。金ちゃん、今日はなんでしょうか」

「わしが、おぼけのほんを、すきなのは、しっとるじゃろ」

「知っとります。それを知らない者はもぐりです」

「わしは、あきたぞい」

「いくら好きでも、時が経てば飽きるものです。好きあった男女や夫婦もそうです。」

誰でもそうです」

「そういう、じじいろん、じゃねえ、じんせいろんを、ききたいのじゃのうて」

「すいませんねえ、爺の人生論で」

「ひがむな、かいじい。わしがのう、おぼけのほんが、あきたというのはのう、わしはのう、ほんのおぼけを、しりたいからじゃ」

「おぼけの本でなくて、本のおぼけ、というわけですか」

「おうむになるな、かいじい」

「やまびこです。そういうものは、もしいたとしても、あまり喋りたくないですね」

「なぜじゃ、なぜじゃ」

「金ちゃんが、本嫌いになるといけませんから」

「ぎゃくじゃ。ほんのおぼけが、おらんかったら、ほんぎらいになるぞい」

「意味がわかりませんねえ」

「ほんまじゃ」

「下手な洒落ですねえ」

「こまったのう。かいじいは、ほんのこととなると、がんこじゃからのう」

「そんなことはありません。わたしは頑固な内容の本が好きなだけで、わたし自身は頑固ではありません」

「がんこな、ないよの、ほんがすきなやつは、がんこもんなんじゃ。すけべえの、ないよの、ほんがすきなやつが、すけべえなのとおなじじゃ」

「一本とられましたね」

「まだ、こてじゃ。あんまり、がんこだと、めんいっぼん、くらわすぞい」

「あやや。それでは、もったいぶるのもこれくらいにして、本のおぼけの話しましょう」

「まってました、といたいところじゃが、ほんまに、そんなもんがおるのかのう。さいきん、かいじいは、わしに、こびとるからのう」

「金ちゃんに媚びても、一文にもなりません。八百万神（やおよろずのかみ）というでしょう、ですから八百万化（やおよろずのおぼけ）、それくらいおぼけがいるわけですから、本のおぼけだって、いっぱいいて不思議はありません。わたしも実は、本のおぼけに、とても興味があるんです。それでも知っているのは、せいぜい六つか七つ」

「それだけおれば、じゅうぶんじゃ」

* *

「まずは【ぼんぼんぼん】を紹介します」

「なんじゃそりゃ。まるで、うちあげはなびじゃのう」
「お金持ちのぼんぼんにしか買えない、高価な本のことです」
「それがおぼけかい」
「まあその、なにせとても高価ですから」
「いくらたかくたって、ちょきんすれば、わしにだってかえるぞい」
「それがその、あまりにくだらない本なので、お金を貯めて買う人はおりません」
「ぼんぼんは、くだらないほんが、すきなのかのう」
「はいその、ぼんぼんはぼんぼんですから、くだらなければくだらないほどの本が
いいのです」
「それは、しらなかったのう」
「つまり【ぼんぼんぼん】は、ぼんぼんのためだけの本であって、おぼけ本の代表
格です」
「わしには、おぼけにゃおもえん。そいつは、くだらないほどすてきなほん、とい
うやつかもしれんのう」
「なるほど、一種の奇書という意味ですね。でもそれは奇という字がついている以
上、やはりおぼけですね」
「りくつはええ。もっと、おぼけっぼい、おぼけぼんを、おしえてくれや」

「それなら、【おくれぼん】はどうでしょう」
「こじきの、ほんかい」
「いえいえ、お盆と暮れにだけ出て来る本ですから、お盆本、暮れ本をまとめて省
略して、【おくれぼん】です」
「まぎらわしい、しょうりゃくじゃのう」
「言葉というものは、生きものですから、しかたありませんね。いずれ遠からず、
〈了解〉は〈かい〉、〈勿論〉は〈もち〉、〈気持悪い〉は〈きも〉、なんていう
時代がやってくるでしょう」
「いやなじだいが、やってきそうじゃのう」
「はい。人間は愚かですから、伝統を大事にしません」
「おぼけも、だいにされないじだいが、やってくるのかのう」
「いえ、おぼけは永遠ですよ。いくら文明や文化が進歩しても、おぼけを抹殺する
ことはできません」
「かいじい、りきせつするのう。ならば、ええ。それで、なんだったかのう」
「【おくれぼん】ですよ。本屋でも、盆と暮れにしか置かれない。家の本棚でも、
盆と暮れ以外は、どこかに隠れていて、見つからないんですよ」
「つごうが、わるいのう」
「いえいえ、都合がいいんですよ。そういう本は、盆と暮れくらいにしか、読みた
いとは思いませんから」

「いずれにしても、つまらん。ほかにないんかのう」

「それなら、【へいぼんぼん】はどうでしょう」

「なまえからして、つまらんのう」

「平凡な内容の本ですからね。平凡なのに売れるというおぼけ本です」

「そういうほんが、あるんかのう」

「あるどころか、本屋の本の九割は、【へいぼんぼん】なのです」

「そらあ、かうやつが、あほじゃからかのう」

「売る阿呆に買う阿呆とって、お互い様ですかね」

「あほらしい。つまらん、つまらん」

「それなら、【しゅくだいぼん】はどうでしょう」

「しゅくだいを、やってくれるほんなら、ありがたいがのう」

「金ちゃんは、宿題が嫌いですか」

「しゅくだいは、きらいじゃないがのう。がっこうは、ぎむでだすからのう」

「義務で出す以外に、どういう出し方があるんですかねえ」

「もっと、いいかげんに、だしてほしいのう」

「好い加減ですか」

「それで【しゅくだいぼん】にいいかげんに、やってもらえればのう」

「いえそれが、【しゅくだいぼん】は、宿題をやってくれるおぼけではなくて、宿題ばかり出すおぼけです」

「くだらん、つまらん」

「それなら、【ばかぼけぼん】はどうでしょう」

「ばかにぼける、ほんかい。もともとばかなら、ばかにぼけるひつようもあんめえ」

「失礼しました」

「ばかにするでねえ」

「それなら、こんどこそ、【ふくせいぼん】はどうでしょう」

「むかしのほんを、むかしどおりにつくるって、あれかのう」

「それは複製本。わたしのいつてるおぼけは、腹声本。腹から本音でいう本のおぼ

け」

「そらあ、ほんねはたいせつじゃが、ほんねというのは、わるくちばかりじゃからのう」

「悪口はいけませんか。悪口は進歩につながりませんか」

「わるくちでつながる、しんぼなんざ、だめだのう」

「駄目ですか」

「まったく、だめじゃ」

「それならとっておき、【せんぼん】はどうでしょう」

「はりせんぼん、のますっていう、あれか。それとも、せんぼんのつくかのう」

「はずれはずれ、やったね。【せんぼん】は【ぼんぼんぼん】や【へいぼんぼん】とはちがって、なかなかのものですよ。なにせ本なのに、海に行って幽霊船になるんです」

「そらあ、おもしろそうじゃのう」

「よく船乗りが見る、あれです。海上で深い霧のなかから現れる幽霊船。あれは大半が【せんぼん】なのです」

「しらんかったのう」

「そうでしょう、わたしも昔は知らなかった」

「どうして、しったんじゃ」

「【しらんぼん】という、本のおぼけで知ったのです」

「なんか、いんちきくさいのう」

「それは【いんちきぼん】という本のおぼけです」

「さっきからきいとったら、ぼんぼんぼんって、なんでもかんでも、ぼんぼんぼんつけりゃいい、おもっとるんじゃあるめいな」

「そう聞こえるだけですよ」

「わしは、ぼんぼんぼんきいとると、あたまさ、ぼんぼんぼんたたかれとる、そんなきぶんになるんじゃ」

「じつは、【あたまたたきぼん】という本のおぼけも、【もぐらたたきぼん】という本のおぼけもいるんですが、説明しましょうか」

「せつめい、いらん。じかんのむだじゃ」

「そういえば、【じかんのむだぼん】という、本のおぼけもいましたねえ」

「もうええ、かえる」

「あのう、【かえるぼん】という、本のおぼけもいるんですが」

「くそつたれ、なんていったら、【くそつたれぼん】という、ほんのおぼけもいるというんじゃろ。そのほんは、くそばかりたれてこまる、そういうんじゃろ」

「ばれましたか」

「ばれとるわい。きつと、【ばれとるわいぼん】も、おるんじゃからのう」

